

村上君のこと

村 野 四 郎

森岡の大坪孝二君から、ふいに「いい報せでないですが」といつて、村上君の死んだことをしらせてきた。やっぱりに間に合わなかつたか、と私はなげいた。

じつは、詩集「動物哀歌」が一冊もなく、希望者に送ることが出来ないというので、その改訂版を思潮社から出してもらうことになつていたのである。前の詩集は小さな二段組みで、あんまり可哀そうなので、こんどはもっと立派な詩集にと、思潮社の小田君も心配してしてくれた。

この改訂版の出版は、ある岩手出の老婦人の厚意によるものだが、村上君もたいへんよるこんで、たのしみにしていたようだ。

そのことについて、一二月前手紙をよこしたが、そのときの村上君の手紙は字が乱れていて、もちろん読めなかつた。しかし自分では、この眼も体の恢復につれて、だんだんよくなるそうだ、とかいっていた。

だが、この手紙が、私の見た村上君の最後の字になつてしまったわけだ。

村上君の詩は、もう十年以上も見えてきて、詩誌「無限」へも時々発表してもらつたが、はにかみ屋の彼は、めつたに手紙をくれなかつた。

去年の秋盛岡へ旅行したので、大坪君や高橋昭八郎君とつれ立つて国立療養所に寝ている彼を見舞つてやつたら、たくさんのベッドの一つから、はにかんだような顔をして起きてきた。ちょうど「動物哀歌」が出来たばかりだったので、彼はいつそう少年のように頬を赤めて、しばらく面会所の火鉢のそばで話した。

私は次の日、陸前高田へまわつた。高田は彼の生れた町だつた。私は講演の時間を少し余らして、「ここで生れた村上昭夫は、すばらしい詩人だが、いま療養所で苦しんでいるから、皆さんで大事にしてやつて下さい」と市の人たちに頼んで、詩集の中の詩を一つ二つ朗読した。

その後すぐ、高田市から詩集の註文が三〇だか五〇だかあつたと、大坪君が言つていた。帰京すると、まもなく土井晚翠賞の選考が、草野心平さんのところであつた。私は序文もかいてのことだし、知り合いでもあるので黙つていたが、いきなり心平さんが「動物哀歌」をとりあげて、「おれはこれに決めた」といった。私はその眼力に敬服すると同時に、晩翠賞のためにも、村上君のためにも、本当によかつたとおもつた。

そして年をこして、日氏賞まで受賞した。その報せをうけたとそれにしても、いい詩をかく詩人は、どうしてこうも不幸な早死をするのだろうか。いや、それは逆かもしれない。村上君は、その詩の中で、自分は治らない病人だから、それで聞こえない雁の声がきこえるのだ、と言つた。

どちらにしても、いい詩の事になると、かなしいことばかりなのが、何としても悲しい。